

女の視点で見る農業経営



体を動かして汗をかく。働いて、
そういうことじゃないかな。そして
パートナーがいれば、お互いの
進歩を確認し合うことができる

池田朋美さん

いけだ・ともみ/昭和40年11月4日生まれ。福岡県行橋市出身。8歳から茨城県鹿嶋町(現・鹿嶋市)に移り住む。県立鹿嶋高校卒業後 中央電気工業勤務。昭和62年、吉宏さんと結婚し就農。義父勇作さん(73歳)、義母ふみさん(70歳)との4人でキャベツ3ha、じゃがいも3haを経営。誠一君(8歳)と大宏君(6歳)の母。鹿嶋市で農業に携わる女性が集う「若葉会」会員。〒314 茨城県鹿嶋市下津466 ☎0229-82-5772

「今年ね、とーつてもいいキャベツができたの。葉っぱもとても青くて、巻きが多い。そして何より、ロスがない。こんなの初めてよ!」

とうれしそうに話す池田朋美さん(30歳)。夫の吉宏さん(37歳)と吉宏さんの両親の4人で、現在キャベツ(30ha)とじゃがいも(30ha)の栽培を手掛けている。

吉宏さんも舌を巻くほど、鹿嶋での農業を楽しんでいる朋美さんだが、意外にも彼女は茨城県の出身ではなく、また農家に育ったわけでもない。生まれは福岡県行橋市。3人姉妹の真ん中で、子どもの頃から生き物が大好き。いつも野山を駆け回っていたという。父親は(株)住友金属(住金)に勤めるサラリーマンだったが、8歳の時、住金の大工場があるここ茨城県鹿嶋町(現・鹿嶋市)へ転勤となり、家族で移り住んだ。高校は県立鹿嶋高校に入学し、卒業後、住金の系列の(株)中央電気工業に入社した。

中央電気では、朋美さんは事務職を担当していた。ところが、自分の仕事は冷暖房のきいた部屋の中で、座ったままで進んでいく。そんな日常の中で、社員食堂で同席した現場の溶鉱炉で働く男性たちの姿は印象的だった。

「金属製の耐熱服を着て、火花を散らしながら働いているおじさんたちは、作業服まで汗びっしょり。塩を嘗めながらご飯を食べたり、とつても辛い青い唐辛子を白いご飯の上に乗せて食べていたりするんです。その姿を見てみると、ずっと冷房のきいた部屋にいる自分がかげない。本当に「働く」っていうのは、こういうことじゃないかと思った」

そんな思いがつのり、ある日とうとう上司に、「私も現場へ行かせてください」と申し出た。しかし、そんな突飛な希望が聞き入れられるはずもなく、再び机に向かう日々が続く。そこで朋美さんは、仕事が終わると、会社近

くのグラウンドや自宅のあった住金の社員住宅の周りを5周10周と走り、汗を流すようになった。

「人が動く」って書いて「働く」っていうんだから……」

体をどんどん動かして自分を「追い込んで」いくのが好き。汗を流した後の気持ちよさを、もともと味わっていた。そんな思いは、10代の頃から彼女の心の中で燦っていたようだ。

ママのトレードマークは長靴

「朋さん、ちょっと農家の人とお見合いしてみない?」

そんな話を持ちかけたのは、いつも家の周りをぐるぐる走っている妹を見ていたお姉さんだった。その相手こそ、現在の夫、池田吉宏さんである。吉宏さんは、高校卒業後、歯科医を目指して、幾度か大学受験を試みたものの断念。故郷に帰って、本格的に農業の経営に取り組み始めた時期だった。早く結婚して、心配をかけた両親をなんとか安心させたい。そんな吉宏さんの声が、人づてに、朋美さんのもとへ届いたのだ。

「農家の人と聞いても、ちつとも抵抗はなかったし、その道で本当に頑張っている人なら、会いたいと思いました。農作物を大切に育てる、体も心も大きい人なんだろうなって……」

ところが、吉宏さんの第一印象は、そんな朋美さんの「農業青年」のイメージとは、ずいぶん違っていたようだ。

「もやしみたいにやせっぽっち。この人、鉛筆より重たいものを持ったことがないんじゃない? って思ったくらいでした」

それでも何度かデートを重ねるうち、池田家の農作業を手伝うようになった。

「私が行くと、『助かった、どうもありがとう』って言われるのがうれしかった。やっぱり会社で事務やってるよりも、農業の方が自分には向いて

る。まわりの人に「大変だよ」とか、『できないよ』とか言われたけれど、その気になってやればできないわけがない」

かくして、朋美さんは、21歳で3年間のOL生活に終止符をうち、池田家の一員となった。

手押しの手押しに、20馬力のトラクターが1台。それが結婚当時の池田家の機械設備のすべてだった。作付け面積はキャベツが7.8a、じゃがいも1.5ha、現在の半分以下である。キャベツの収穫も、みんなで1日80箱詰めるのが精一杯。「農業のこと、よくわからなかったから、まあこんなもんだらうと思っていました」

昭和62年11月に長男誠一君を出産。産後間もない頃は、家で家事と育児に専念していたが……、「お義父さんとお義母さんが疲れて帰ってくるのを見ると、家にじっとしていられない。子どもをおんぶしてでも、一輪車押ししたり、ダンボール箱を作ったり、とにかく自分もやりたかった」

と、子連れで畑へ出るようになる。ある日、ダンボールに誠一君を寝かせて作業をしていると、キャベツ畑で行方不明になってしまった。ハイハイで畑の中へもぐり込んだらしい。あわてていま張ったばかりの防鳥網を外して捜し回ると、キャベツを枕にしてスヤスヤ眠っていた。……そんなこともあった。

平成元年に次男の大宏君を出産。彼が10カ月になると、2人とも保育園に預けるようになった。この方が心おきなく働けるからだ。迎えの時間が来ると、畑からまっすぐ保育園へ向かう。そこには、看護婦さんや店員さんなど、仕事着姿の母親がたくさん来ていた。ただ、農業をやっているのは、朋美さんだけ。

「誠ちゃんのパパは、いつもドロだらけの長靴で来るね、って言われた」

そんな誠一君の言葉が気づかなくて、一時は家に戻って着替えてから迎えに行ったこともあった。

でもそれが次男の大宏君になると、

「僕のパパはママなんだからそのままでもいいよ」と言ってくれた。看護婦さんの白衣と同じように長靴は、ママのトレッドマークなのだ。

そんな2人もいまや小学生。将来なにになる？などと話しはじめる頃だが、池田さん夫妻は、子どもたちに「大きくなったら農業をやって」とは言っていない。

「大切なのは、とにかく私たちが明るく仕事をすること。そうすれば、子どもたちもこの農業のよさを、きつとわかってくれる」

春先のある日、学校で誠一君の先生が「明日は雪になりそうですね」と言ったら、クラス全員が大喜び。ところが誠一君だけが「ダメだー！いま雪が降ったら、うちのキャベツが腐っちゃう」と言ったという。ドロだらけの長靴をイヤがっていた誠一君も、ちゃんと両親の思いを受け止めているようだ。

機械でする土づくり？

平成3年頃、池田さん夫妻は、土づくりに行き詰まりを感じるようになっていた。それまでは、生鶏糞や稲わらを土に入れたり、深耕ロータリで土を耕して、できるだけ作物の根が深く張るようにと心掛けていた。しかしその結果、熱心な思いは裏目に出て、耕した土の下に硬い耕盤ができてしまい、畑に水が溜まるほどになってしまった。

そんなある日、朋美さんが農機店から持ち帰ったサブソイラのカタログが、吉宏さんの目に止まった。爪が土中に深く潜り込み、耕盤を切り崩し、水はけをよくするという。

これはと、さっそく問い合わせ、農機メーカーの営業所長の薦めで二連式のパイプサブソイラと、17インチのリバーシブルプラウを導入することにした。それに合わせて、新車のトラクタ、わらや農機を入れる格納庫も新設。翌年のキャベツ

の作柄は、格段によくなった。

「岩盤みたいな土が、見る見る砕けていきました。そこをプラウで耕すと、酸素が入りこんで、土が生き返っていくんですね。キャベツがそれに応えている」のが、手に取るようにわかりました」

ここで、池田さんたちは、鶏糞などの有機物を入れるのはまた、違った機械を使った土づくりに目覚めた。

「どんなに深く耕したくても、鋤1本で何十cmも天地返しをするのは無理。だったら機械に頼るしかない。これは一時期お金がかかっても、やるしかない」

と朋美さん。ただ、吉宏さんによれば、「朋さんの女1人分の働きが、全部農機具代に回ってしまったかもしれない」

とのこと。家族4人で働いた収益の多くが、機械の支払いに回ってしまう。それでも機械を使って「土をよくしたい」という思いはみな同じ。勇作さんもふみさんも「いまは投資の時期」と、池田家の機械化を応援してくれている。

とはいえ、経営のすべてがスムーズに決まるわけではない。たとえば、じゃがいもの植えつけの際、土壌消毒剤を散布した畑に、プラウをかけてから植えつけするか、それともロータリだけにするか、家族の中で意見が分かれたことがあった。

吉宏さんは、「プラウでかき回すと、せっかくな撒いた消毒剤が散って、形の悪いイモになってしまう」ことで、市場で買い叩かれることを心配した。一方勇吉さんと朋美さんは、「多少の形の悪さを覚悟してでも、プラウをかけた方がいい」と反対。結局ロータリだけをかけたのだが、土中で種イモが腐ってしまうという最悪の結果。

「やっぱりプラウをかければよかった。でも、これは次につながる勉強だと思わないと……」

吉宏さんの言い分にも一理はあった。形が悪かったり、表面に「そばかす」のあるじゃがいもが



今年のキャベツは「こんなの初めて！」という会心のできばえ。今後も楽しみだ

できたりするのは避けたいものだ。
「それでも、うちのおイモは、栄養がいっぱいあって、甘味もあるし、おいしんですよ。やっぱり私たちは味で勝負したい。それをわかってくれる人を買ってほしい」

そんな矢先、池田さんのところへ生協の仕入れ担当者がやってきた。

「お宅のキャベツがほしいんですが……」

それまでは千葉県を中心に買いつけをしていたが、茨城にもいい生産者はいないかと足をのびていたという。なんの面識も紹介もなく、池田さんの畑を見ただけで契約したいと言ってきた。朋美さんが言う「とってもいいキャベツ」を「わかってくれる人」は、向こうからやってきたのだ。「土づくり」にこだわって作りつづけたキャベツ畑が、何よりの「名刺」がわりになってくれた。

2人がトラクタを運転できる意味

さて、機械導入当初は、主に吉宏さんが運転をしていたが、ここ数年、朋美さんも運転できるようになり練習を始めた。家の前で15馬力のトラクタを乗りこなすことから始めて、徐々に畦道へ、公道へ、そして畑へと出ていった。

同じ1台でも、それを動かす人が1人か2人かでは、大きな違いがある。朋美さんが、35馬力のトラクタを運転できるようになったことで、作業効率もグンと上がってきた。じゃがいも畑のまわりは、住宅地が多い。だから畑に鶏糞を混ぜ込む作業は、手早く行わないと近所から苦情が出てしまう。これまでは、マニアスプレッダに鶏糞を吸い込ませて畑に散布し、その後ロータリをかけるという作業を吉宏さん1人でやっていた。でも今年、ロータリを朋美さんが担当。これまで2日かかった作業が1日で終わった。

「機械の運転をいつまでも吉宏さんだけがやっていては、規模を広げてもすぐ限界がきてしまう。私は最初から上手にはできないけれど、遅くてもなんとか……」

だからといって、何もかも男並みにやろうとも思わない。同じ畑に「2人の吉宏さん」、「2人の朋美さん」は必要ないのだ。吉宏さんにしても、こんな体験がある。

「子どもをおんぶして、畑でキャベツを積んだ1輪車を押してみたことがあります。あの時は、たいへんだなあー、女の人はすごいなあと思った」お互いに、違った視点から同じ作業に携わることで、違った面が見えてくる。それが新しいやりがいにつながるし、お互いの進歩を確認しあえるのだ。だから、朋美さんが機械を操れるメリットは効率アップだけではない。たとえば、最初の頃はゆらゆら曲がっていた畝が、だんだん真っ直ぐ立てられるようになってくる。吉宏さんも朋美さ

んも、それを見て顔を見合わせて、「うまくなったね」と、喜びを分かち合いたいと思う。自分を認めてくれるのは、家族しかいないのだから。それは一緒に働いている者でも、同じ機械を動かした者同士でなければわからないものだ。

結婚して10年、まだまだ農家としては成長の途中だという2人、

「あと30年、いや40年はいっしょに作り続けたい」と吉宏さん。それに対して、

「すると、春キャベツはあと40回しか作れない。そう思ったら、1回1回を大切にしなくっちゃ」

と、大きな瞳を見開いて、はつらつと語る朋美さん。結婚したの頃は、畑一面のキャベツを前にして、途方に暮れたこともあった。でもいまは、「1日400箱なんてラクラク！」だという。

この10年を振り返ってみると、大きな病気やケガもなく、疲労でダウンすることもなかった。最初は「サラリーマンの家から来たお嫁さん」だと思っていた家族も、いつしか朋美さんの並外れたパワーと、前向きな姿勢、そして「農業大好き」という思いに、一目置かざるを得なくなってきたのではないだろうか。「朋さん、朋さん」——池田家でも朋美さんは、お義父さん、お義母さん、吉宏さんから、そう呼ばれている。そこにはいっしょに池田家の農業をやっていく、仲間の一人に對する「頼もしさ」が感じられる。

「汗を流す仕事がしたい」と、グラウンドを走り回っていたOLが、10年後のいま、35馬力のトラクタでロータリを使いこなすまでになった。それでもまだ「自分を追い込みたい」朋美さんは、まだ飽き足らない様子。

「いつか、トライアスロンをに挑戦したい。マラソンと自転車には自信があるんです。あとは水泳だけかな？」

とりあえず、次は、プラウの操作に挑戦する予定だ。
(三好かやの)